

ム
ラ
カ
三
の
ホ
ー
ム
ラ
ン
川
崎
徹

ムラカミ
の
ホーム
ラン
川崎徹



川崎 徹 (かわさき・とおる)

1948年、東京生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。CMディレクターとして多くのヒット作品を手掛ける。著作に『0』『彼女は長い間猫に話しかけた』『石を置き、花を添える』『猫の水につかるカエル』『会話のつづき』『最後に誉めるもの』などがある。

ムラカミのホームラン

二〇一四年六月二六日 第一刷発行

著者 川崎 徹 かわさき・とおる

発行者 鈴木 哲

発行所 株式会社講談社

〒一〇二一八〇〇一 東京都文京区音羽二一―二二―一

出版部 〇三―五三九五 三五〇四

販売部 〇三―五三九五 三六二二

業務部 〇三―五三九五 三六一五



印刷所 凸版印刷株式会社

製本所 大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記の上、小社業務部宛にお送り下さい。送料小社負担にてお取り替え致します。

この本のお問い合わせは、群像出版部宛にお願い致します。

ISBN978-4-06-219015-2 Printed in Japan

© Toru Kawasaki 2014

目次

ヨ
シ
ダ

95

ム
ラ
カ
ミ
の
ホ
ー
ム
ラ
ン

7

ムラカミのホームラン

装幀 セキネシンイチ制作室
写真 西宮大策

目次

ヨ
シ
ダ

95

ム
ラ
カ
ミ
の
ホ
ー
ム
ラ
ン

7

ムラカミのホームラン

撮影スタジオ、編集室、録音スタジオを行き来する生活を続けるうちに、革靴とは縁が切れ、三百六十五日どこに出かけるにもスニーカーで通す人間になっていた。

一足履きつぶすと一足買う。新しいデザインが出たからとか、通りがかりに目がいつて衝動買いするような性質でもないから、無尽蔵に増えることはない。下駄箱にはいつも決まった数が並んでいる。色やデザインより足型に合うものを選ぶうちに、気がつけばすべて国産のあるメーカーの製品である。

冠婚葬祭以外、いや、めでたい席にはほとんど出ないので、革靴を履くのは不祝儀の時に限られていた。

靴も心得ている。クローゼットの最上段にしまった箱から出されると「どなたが亡くなりました？」とたずねてくる。

「仕事仲間だよ」

「それはそれは」沈んだ声で言う。

「お齡は？」

「同じ齡」

「六十五」

「六」

「そうでしたそうでした、一月で六になられたんだ、うっかりしておりました、おめでとうございます。急でらした？」

「先月電話で話したばかり」

「その時はお変わりなく？」

「変わらないっていても、病気が病気だったから、声は弱々しくて」

「この世の果てから届くような」

「つまらぬ喻えを言うな。術後の経過もよかったから、順調で、あと三年はいけるなって

本人は言つてたのに、手術をしなければもう少しは生きたかもしれない」

「いただいた寿命というものがありませんから」

「分かつた風な口をきくな。急を聞いて見舞つた時は意識もなくてさ、話しかけてはみたけど」

「耳は聞こえてるっていうじゃありませんか」

「いまさら頑張れもないし、もう十分頑張つたんだよ、これまでの礼を言つただけだ」

「聞こえておりますよ、届いておりますつて」

「香典五万でいいかな？」

「とくにお親しかったです？」

「四十年の付き合ひ、少なくないか？」

「多けりゃいいっていうもんでもございませんよ」

「分かつた風な口をきくな」

「三万でもよろしいかと」

革靴はいつもこちらの心づもりより少な目の額を提示する。五万と言えば三万、三万と思えば二万、一万。わたしが多目に包みたがる人間であることを知っていた。心づもりの

まま包む、靴の意見に従う、半々である。

時差になじめぬまま五時に目が覚めた。

打ち合わせを終え部屋に戻ったのは十二時をまわっていた。フロントで受け取った東京からのファクシミリに目を通してベッドに入ったのが一時だったので、四時間しか眠っていなかった。

浅い眠りのなかで、いくつもの体臭と香料の入り混じった濃い匂いをずっと感じていた。入国審査の列に並んだ時から続く、この街の匂いだった。

外し忘れた腕時計をかざし、日本時間を計算する。置いてきた時間は忘れるようにしているのに、つい考えてしまう。こちらでは始まったばかりの一日をすでに3/4終らせた、赤味がかった暮れなずむ街並みが、絵葉書の風景のように浮かんた。自分のいない部屋が過ぎる。いまそこにはいないことへの不安を感じた。住み慣れた場所を離れている時、度々湧く焦躁だった。

となりの部屋でカーテンを引く音がした。

プロデューサーも目覚めたのだ。わたしも半分だけ開けた。明け始めていた。カーテン

と窓ガラスの間にたまったぬるい空気が顔を舐めた。カーテンからもこの街の匂いがした。

前の路上にホームレスらしき女が座り込んでいる。目いっぱい膨らんだ紙袋を抱え、裸足の黒い脚を前に伸ばして。縮れた髪の毛に指を入れ、かきむしる。欠伸をする。脇に小型ラジオが置いてある。前日の朝も彼女はそこにそうしていた。身なりもラジオの置き場所も同じだった。そう言い切れるほど前日の彼女をしっかりと見たわけではなかったが。

さらにその前の朝、わたしがまだ海の上を飛んでいた頃も、おそらくそこでそうしていたのだ。わたしは自分が見なかった場面を呼び出した。想像と現実、ふたつの同じ光景が重なった。

初めてこの街を訪れたのは十一年さかろぼ溯った一九七〇年だった。大阪万博の年、昭和四十五年。ロケーションチームのいちばん下っ端、演出助手として。実際は雑用係だったから、撮影場所の許可どりをしたり、撮影済みフィルムを現像所に届けたりの記憶しかない。化粧品のコマーシャルだった。ビルの谷間を歩くモデルを空撮するヘリコプターと地上の無線連絡の係もした。ヘリコプターの速度と地下鉄の駅からモデルが出てくるタイミングを合わせるリハーサル中に降り始めた雪は翌日もやまなかった。結局その場面は撮影